

阪神大震災後の支援に関する一考察

——主としてPSWの役割について——

松永 宏子

I. はじめに——2月初めの被災地

大都市神戸を中心に発生した地震による大災害の後、現地はもちろん全国的に混乱の余波は広がり、いろいろな情報が飛びかっていた。「現地の医療スタッフは、不眠不休で働いており、応援を求めている」「ボランティアが来ると仕事が増える、迷惑だという声もある」「精神科では特に関西弁のしゃべれないワーカーは要らないといっている」「忙しいので道案内をする暇はない、まして食事やお茶の世話に時間をとられたくないから、手伝いは要らないといっている」など、いろんな声が、先発隊で視察に行った人やマスコミを介して聞こえてくる。その中で、「それでも現地のスタッフは、かなり疲れているので、とにかく現地に来て直に、必要な援助について話し合っほしい」との依頼を受けて、震災後15日目の神戸を訪れた。新幹線新大阪からJRで芦屋下車。駅前の大きなビルは既に解体作業が始まっていた。あちこち壊れた町並みを見ながら、案内版に従って、JR代替バスを待つ長い長い列の最後部に並ぶ。のろのろと進む列の中で気が急ぎ、バスと電車の輸送力の差を思い、次々とホームに入ってくる電車に慣らされている

自分の時間感覚を反省させられたりした。やっと「三宮」行きのバスに乗ったが、ノンストップバスは特別のバスレーンを走るため、隣り車線のひどい渋滞に比べるとかなりの速さで走っていた。車窓からの高速道路の橋梁は崩壊して中の鉄骨が飛び出し、現実というよりテレビの画面の一コマのような信じられないほどのすさまじさを示していた。一方では復旧作業が急ピッチで進んでおり、崩壊した部分を切断してコンクリートを運び去った箇所等は、道路が広いという印象を与える所さえもあった。三宮からまたまた代替バスに乗り換えて、高速神戸で下車。やっと兵庫県精神保健センターに着いたのが、家を出てから7時間半後。大震災から15日経っていた上、センターのある兵庫区は震災の中心部からはずれていたため、コンビニエンスストアも開店し、辺りはかなり落ち着きを取り戻していた。

II. 2月1日の精神保健センター

その日の精神保健センターは、粉々に割れたという窓ガラスも、入れ替えが終わっており、交通網が復旧しつつあることも幸いして、多くの職員が出勤し、電話やファックスや来談者に対応していた。たまたま前日の新聞に、精神保健センターに関し、「救護所設置を拒む——多忙理由に対応遅れ」という記事が出たこともあり、特にマスコミへの対応には気を使っているようであった。当初片道3時間から4時間かけて職員が通勤していたのに比べると楽になったとは言えるものの、まだ水もガスも断たれ、水洗トイレも使えず入浴もできない状況のため、被災者であり職員であるという難しい立場からくるストレスも強く、「まだ何も考

A study concerning the supports after the Great Hanshin Earthquake: in considering of the PSW's roles at the disaster

国立精神・神経センター精神保健研究所
社会精神保健部

〔〒272 千葉県市川市川国府台1-7-3〕

Hiroko Matsunaga: National Institute of Mental Health, NCNP, 1-7-3, Kohnodai, Ichikawa, Chiba 272

えられない」という職員もいた。

一段落したところで、センターの相談員の人達から、現地の状況の説明を受け、精神科ソーシャルワーカー（以下PSW）にかかわる問題を話し合った。この間にもセンターには、精神保健関係者からの、ボランティアに関する問い合わせが続いていた。ボランティアの申し出でを受け入れ、混乱を收拾し組織化し配置する大変さを見ていると、現地の声が悲鳴にも近い実感として納得できた。「もてなしてくれなくていい」と外部者はいうが、現地の人々が紹介と説明とお茶のもてなし等ボランティア関係に費やすエネルギーの大きさを見せられての刺激は強く、その後も長く支援についてのこだわりとなった。

それにしてもあの我も我もという追い立てられるような有志の殺到状況は、何を意味していたのであろうか。その2日前からセンターではボランティア精神科医O氏が相談に応じる一方で、センター職員や県地域保健課派遣の職員と協力して「センターニュース」を発行していた。このニュースは精神保健関係の活動報告や統計資料などの貴重な情報をその後も全国の関係者に送り続け、重要な役割を果たした。O氏は、No. 2の中で、「避難所へ入る各地区の精神科医療チームへのお願い（その1）」を載せ、No. 4において、「現地以外でFAXを見られた方へ」を書いて、単発的に現地入りするのではなく、まずそれぞれの地で情報を集め、可能な限り組織化して、現地の負担を少なくするよう呼びかけている。「感謝して、その上でのお願い」と断り書き付きのこの文書も、現場で調整に時間を割いている人々の様子を見ていると、重い意味を持ってくる。現地が「感謝」と「迷惑」という気持ちの間を揺れながら援助を求めている現実、そしてその正直な気持ちを、文字にできるのはO氏がボランティアだからこそ、角を立てずにやっているのも事実であった。多職種・多団体・多様な個人の集まりであるだけに、それらをコーディネートすることは、想像以上に難しい。全国からの善意を何とか前向きに機能させなければならない。せめてPSWボランティアの関係だけでも、兵庫PSWの人達と協力してコーディネートしようと、翌日からセンター職員の人と各保健所

等の意見を聞いて回るようになった。

III. 町の様子と職員たち

センター相談員の方が自宅から準備してきてくれた昼食と飲料水をリュックに、案内されながら被災の中心部永田区から灘区にかけてバスと徒歩とで町を歩き、保健所や病院や避難所の精神保健関係者から話を聞いた。長田区は火事で町の大半が焼け落ち、中学の教科書で見た戦後の焼け野原の写真の思い起こさせ、灘・東灘は木造モルタルの民家が壊れて木屑・瓦・土壁の土などが積み重りまさに瓦礫の町と化し、一瞬の恐怖の後をなまなましく残していた。崩れた町を歩いている時に出会った人々は意外に元気に見えた。ショックはゆっくりとやってきてPTSDをひきおこすのかもしれない。精神保健相談員の姿を見て、声をかけて来た障害者の人に出会ったりした。

神戸市の保健所は、区役所と同じビルにある所が多く、保健所に行くためには、まず1階の避難民の居場所を通り抜けていかねばならない。フロアーには、真ん中の通路スペース分だけをあけて、左右に一人布団一枚分位ずつ各個人が私物を置いてそれぞれの居場所として困り、昔の船底の船室のようであった。また公園や区役所の前庭などには避難テントが張られ、学校の体育館や教室も避難所あるいは救護所として使用されていた。プライベートなど存在しない空間であった。一般医療の救護ではAMDAのチームの活躍が目立ち、その奥のコーナーに、精神科救護所が設けられていた。精神科という狭い世界なので知り合いの精神保健従事者も多く、外部からの手伝いについて率直な意見を聞くことができた。すでに水道が復旧した保健所もあれば、仮設トイレにポリバケツの水という保健所もあり、住まいが崩壊したり親族を失った職員もいれば、食器が割れた程度という職員もいる。同じ町の中で職場的・個人的事情は残酷な程さまざまで複雑であるようにみえた。

県や市の保健所では、緊急勤務体制（9時から21時まで、土・日なしの週84時間勤務）の職員が、信じられないような元気で働いていた。職員であり、同時に被災者でもある人々の中には、震災

以来家に帰らず、保健所のフロアに寝泊まりして、全国からの精神科医療チームの人と活躍を続けている人も多くいた。頑張りすぎている職員の姿は、燃えつき症候群になるのではないかと、こちらが心配になるほどであった。彼らは2週間の経験を元に、避難所訪問で患者さんの掘り起こしをしない様に、薬物依存の人に二重に薬物を出さないように等、医療チームに対するマニュアルも作っていた。また、精神病院では、避難所生活に耐えられないあるいは不安が非常に強いという外来患者さんの10数名が、ベッドが満床のため病院玄関ホール辺りに寝泊まりしているとのことで、その人たちのこと入院患者さんのこと、職員の業務量の多さもまた相当の様であった。

IV. PSWボランティアに対する意見

それぞれの保健所や病院では、精神保健相談員やソーシャルワーカーと話をし、PSW関係のボランティアについての要望や現状を聞かせてもらった。

個々の職場の状況によりニーズは多様であった。

- (1) 日常の業務体制に戻りつつあるので、あるいはすでに関係関係者でボランティアは足りているので、精神保健相談関係の手伝いは要らない
- (2) 平日は何とか自分たちでやれるが、1週間に1日だけ精神保健相談員が交代で休みたいため、週末1泊2日のPSWのボランティアがほしい
- (3) 現地の精神保健相談員は、精神科救護所に残って相談業務等に従事したいので、避難所回りや薬物搬送等をしてくれる人で、1週間単位で手伝える人をほしい
- (4) 急患を病院に搬送するための救急車に同乗してくれるPSWが必要
- (5) 病院内の業務が平常以上に多いので、入院患者で家屋が壊れた人等について、家の見回りや公的義援金受領に同伴できずにいる。その手伝いが欲しい
- (6) 救護所での個人的手伝いよりも、将来に向けて、精神障害者が地域で暮らしていくため

に、「住む場所」「集う場所」「働く場所」の確保等に、協力してほしい

などであった。それらの要望のうちとりあえず(5)(6)を除く緊急の援助依頼を支援するため、全国のPSWに協力を呼びかけ、PSWのボランティア・センターを設置し、互いの条件を調整してそれぞれの現場に派遣することを始めた。

V. 地域作業所関係者の会議

交通機関がどうやらつながり始めた中で、精神保健センターにおいて、震災後初めての作業所関係者の集まりが持たれたので、同席させてもらった。その日までに把握できた23か所の作業所の1か所ずつについて、ていねいに写真を撮り、利用者や職員・家族に関して、足で集めた貴重な情報が報告されていた。実際職員は震災発生直後から、メンバーが住んでいたアパートや住居そして避難所を、交通機関が寸断され、ガラスや瓦礫が散乱している道路を歩いて、全員の安否を訪ね回ったとのことであった。

見る影もなく全壊している作業所、道路側の建物が崩れ近づけず様子をつかめない作業所、建物の外側の損傷は写真では余りひどくないが内部の損傷がひどく作業所再開が危ない所、ほとんど無傷で交通機関の再開と共にすでに作業を再開している所等であった。幸いに建物の損傷が少なくても、家族会長の状況がつかめなかったり、職員が実家や知人宅に避難して神戸を離れていたり、避難所生活で作業所をやっていく元気とゆとりがなく再開が難しかったりと、状況はさまざまであった。

それでもこの日までに14箇所の作業所では、半日だけオープンしたり、保健所や集会所の一隅を週1回だけ借りてとにかく集う機会を持ったり、平常の活動はできないが顔合せを兼ねて避難所に時々集まり荷物の種分けを手伝いながら、集い励ましあうことで支えあっていた。一つ一つの作業所の報告が、地域で暮らす精神障害者にとって作業所がいかに居場所・集う場所・活動の場として、重要であるかを示していた。

今後の対策に関し、その会合で問題となったの

は、(1)震災で工場等がつぶれ、下請け仕事のめどが立たず作業ができない、つまり集うだけの作業所の現状と補助金の問題、(2)損傷した建物について大家さんが建て直しを迷っている所や取り壊しを始めた所の当面の場所の確保、(3)被災・転居した職員の代替りのマンパワーの問題、(4)作業所利用者で生活保護受給者について、彼らの住んでいた安いアパートのほとんどは崩壊しているため、避難所解散後の住まいの問題などであった。

VI. 長期的支援へ向けて

とりあえずのケースワーク的援助については組織化し実行出来たが、そのほかの福祉的援助・行政への要望について支援行動を求める声がPSWについては強く出された。

- (1) 住居を失った精神障害者の仮設住宅や公営住宅入居確保のための障害者枠の拡大

- (2) グループホームや生活支援センターの設置
- (3) 地域作業所再建・運営・職員の確保
- (4) 断酒会など自助グループへの支援と場所の確保
- (5) 震災後の心のケア対策の充実など

が要望の主な内容であり、これらの実現に向けて、各地で暮らす精神障害者と共に、全国からも声を挙げ、積極的に取り組むよう協力を要請された。彼らが活動をし仲間を得、生活を支えられたきたデイ・ケアや作業所という場の確保は急を要する課題である。

不自由な生活が長引くにつれ、災害後のPTSDも表面化してくるであろう。最近では仮設住宅での孤独死が報道されたり、心のケアの重要性が言われているが、被災した人達が心の痛手乗り越えていけるには、住み集い働くための生活の場の安定が重要であり、長期的支援とニーズ実現に向けて、柔軟に対応していくことが必要であろう。